

著者は、近代仏教史の「史実」を実体的に「歴史叙述」しようとするのではない。本書の目的を端的に言えば、近代日本の仏教（研究）者たちが形成した「日本仏教」という学説・「物語」をキーワードに、近・現代の、とくにアカデミズムにおける日本仏教史研究のパラダイムを明らかにし、その相対化を試みることにある。こうした問題設定と関わる著者の「歴史叙述」への認識は、ヘイドン・ホワイトの「歴史的事実」と呼ぶようなものは歴史家によって言語を用いて構築されたものである」という歴史論に「啓蒙された」ものであるという（「序」三八頁）。

こうした著者の方法論的立場については、異論もあるかもしれない。だが、「歴史叙述」それ自体を言説史としてメタ・レベルで考察し、明治以降の日本仏教史研究と学説を支配してきたパラダイムを明らかにしようとする本書の目的からすれば、こうした立場は妥当だろう。著者は、こうした歴史論の認識に立つことで初めて明らかに出来る次元の問題を、提起しようとしているのである。

具体的な考察では、著者は「日本仏教」という「物語」とその形成史に着目するが、そうした仏教（研究）者たちによる「日本仏教」という「物語」の形成には、「国民国家」（近代における国家の問題の受け止めと問題意識）が重要な動機となっていたという。第一部では、そうした「日本仏教」という「物

語」の形成史とその内容の変遷が、原坦山（第一章）、村上專精（第二章）、高楠順次郎（第三章）、花山信勝（第四章）、家永三郎（第四章）といった仏教（研究）者を取り上げながら、明治維新から戦後にかけて辿られる。続く第二部では、もう一つの仏教（研究）者たちを突き動かした「僧風刷新」（僧侶の堕落をめぐる受け止めと問題意識）という重要な動機に着目しつつ、僧侶の自己批判やそこから形成される「近世仏教」像が取り上げられる（第一章・第二章。第三章では、とくに辻善之助の「近世仏教墮落論」の形成史が示され、第四章では、それが戦後以降の「近世仏教」を中心とする日本仏教史研究の枠組みに如何なる影響を与えてきたのが中心に考察される。そして本書全体としては、近代日本の仏教（研究）者たちが抱えた問題意識と密接に関わって形成された「日本仏教史」のイメージを「物語」として見なし、その形成史を把握した上で、そうした「語り」がいかに近代以降の日本仏教史研究の枠組みを構築してきたかを、思想史の問題として捉え直し、考察を試みようというのである。加えて、著者の問題意識として、そうした学説を構築してきた学者の「政治性」をも不問にしないという点が、重要な点であろう。

二

本書の内容を簡単に紹介しておきたい。まず、「序」であるが、著者の問題意識を知る上で、重要である。第一節において、

近代の「仏教 Buddhism」の生成とその「越境性」に関する研究が紹介される。とくに西洋のオリエンタリズムと結びついて欧米学界で構築された「仏教」概念が、いかにアジアへと影響したかについて、一九九〇年代以降研究の蓄積が増えている動向と、ベルナル・フォールと末木文美士の「方法としての仏教」という従来の二元論を超えた仏教研究の可能性の模索が指摘される。そして第二節では、アジアへ影響した西洋の「仏教」概念を、「東洋人」が如何に受け止め、利用しようとしたかなどについての研究が不十分であることが指摘される。それゆえに著者は、「日本は、「仏教」に限らず、西洋の学術的言説を受け入れたばかりでなく、それを巧みに転覆し、自らの「近代化」に働かせた」（二二八頁）との前提に立ち、研究対象として官学アカデミズムの枠組みにおいて活動した近代日本の仏教研究者数人を取り上げる。すなわち「日本人」というアイデンティティを有する学者が、帝国主義的な「西洋」により与えられた諸言説を如何に利用し、自己を語るに際して如何にそれらを展開させたのか」を考えることが、著者の研究を支える根本的問題だという（二一九頁）。同じく第二節では、明治以降の日本仏教研究の動向、そして戦前までの「明治仏教」が戦後に「近代仏教」として研究が展開され、一九五〇年代以降の近代仏教研究の「三つの柱」である吉田久一（一九一五～二〇〇五）・柏原祐泉（一九二六～二〇〇二）・池田英俊（一九二九～二〇〇四）の「仏教の近代化」を語る「近代仏教史パラダイム」

（大谷栄一）に基づく研究段階を経て、「現在の近代仏教史研究は、ある意味で、その「パラダイム」を批判的に乗り越える試み」（三二二頁）が行われつつある段階と把握される。近代仏教研究のパラダイムの考察を試みる本書は、そうした現在の研究潮流のなかに位置づけられよう。

さて、第一部を概観したい。著者は、近代の「日本仏教」をめぐる言説の特徴の一つは「宗教」「科学」などを踏まえている点にあるとし、第一章では仏教とそうしたカテゴリーとの遭遇について、東京（帝国）大学の講師原坦山（二八一九～一九九二）に焦点を当て考察する。近世と近代の両時代を生きた坦山は、「仏法」を「真」と唱えながら、己が理想的仏教実践の普遍性のなかに再構築し、近世宗学を近代仏教学へと転回する道を開いた」（七四頁）と、その思想的意義が述べられる。

こうした段階を経た仏教が、ネイションとまつわる言説と如何に関連したのかも考察すべく、第二章においては坦山の後を継ぎ、著者が「日本仏教」の歴史的研究を確立したとする村上專精（一八五一～一九二九）とその学術的営為が取り上げられる。ここでは、真宗僧侶かつ官学アカデミズムの頂点に立った村上專精が、「日本仏教史」の枠組みにおいて、それ以前の叙述とは異なり、「宗門」を重視した語りを通して仏教界の欲求を満たしたと同時に、「日本」を強調した記述によって官学的な側面も満たしたとされ（一〇六頁）、その結果、「一八九〇年代中葉まで比較的に自由な言説空間であった「日本仏教」は、

村上專精の学術的営為により宗門の独自性を語る場へと変わっていく。(一〇七頁)という。そして、專精の「思想的な営為により」「日本仏教」は、連続するような、ひとつの「精神」——聖徳太子から親鸞に貫くもの——の発展として語られる段階に至った(一〇七頁)と結論される。

第三章では、一八九〇年代以降の国民道徳論からの要請という思想的背景で成立する仏教言説が、日露戦争を経て大正期において如何に展開されたかを考察するために、東京帝国大学で印度哲学を講じた高楠順次郎(二八六六―一九四五)の「仏教国民の理想」(一九一六年刊)に焦点が当てられる。その著書では、高楠の「真宗中心史観」とでも言うべき仏教發達史が述べられ、真宗信仰によって西洋の「物質的文明」がもたらす「個人主義」の「危険性」を免れると同時に、「日本人」の「個人的生活」を国家的事業へと連絡させる営みへ変えていくような国民道徳論が展開されているという(一三四頁)。こうして高楠が、その「家族国家」論の枠組みのなかで「仏教」を語り直し、同時に「家」制度にまつわる言説を日本の仏教界に導入した結果、「日本仏教」は日本ナショナリズムのイデオロギー装置としての「家」と結合することとなり、このプロセスの結果として「日本仏教」という言説自体もナショナリズムを表現する場へと変質していった(一三八頁)と結論される。高楠の「日本仏教」言説には、アジア蔑視が見られるなど、選民意識や国粹主義との関係をいつそう深めたことも指摘される(一

三九頁)。加えて、著者は、真宗中心史観で官学アカデミズムの頂点にあった高楠の学説が、真宗信者よりも広い読者に及んだことも想像に難くない(二四〇頁)と、その言説の影響の大きさを推測する。

第四章は、昭和期の十五年戦争期の日本仏教論と戦後の展開が考察される。著者は、昭和初年に始まる国体論の隆盛が仏教をめぐる語りに強い影響を与えたという前提に立ち、一九三〇、四〇年代において現れた「仏教の真意義」を「日本の国情」と結び付ける語りの思想的構造を中心に検討する(一五二頁)。具体的には、「体制側」の日本仏教論を象徴する花山信勝(一八九八―一九九五)の著書『日本の仏教』(一九四二年刊)を取り上げ、その内容を明らかにする。次に、家永三郎(一九一三―二〇〇二)の『日本思想史に於ける否定の論理の發達』(一九四〇年刊)に着目し、花山との比較を試み、結論として立場が異なる両者が「鎌倉仏教中心史観」と呼ぶべき「聖徳太子↓鎌倉仏教」という筋書きで「日本の仏教」を語り、「鎌倉新仏教」をして「日本の仏教」の思想的頂点たらしめる論を提示(二六三頁)したことが指摘される。戦後は、花山には、戦前のような仏教論は影を潜め、「鎌倉仏教中心史観」では聖徳太子が外され、代わりに鎌倉仏教の民衆性が強調されていたという(二六七頁)。

こうして、第一部の結論として、「日本仏教」の語りの成立から、それが、様々な変化を遂げ、「聖徳太子↓鎌倉仏教」と

いう筋書きが成立し、十五年戦争期の段階に、「鎌倉新仏教中心史観」という言説が定着したことが指摘される(二七八―二七九頁)。

三

続いて第二部を概観する。第二部は、「近世仏教墮落論」(以下「墮落論」)に考察の焦点が合わされ、辻善之助(一八七七―一九五五)の「近世仏教の衰微」という理解がいかに「墮落論」の形成と関わったのか、さらにその展開・定着・廃棄の過程が考察される。すなわちなぜ「墮落論」が形成されたのかを思想的に明らかにし、加えて「墮落論」の成立背景を検討することで、その歴史的意義を考えたいという(二八五頁)。具体的には、第一章では、近世後期の僧侶慈雲尊者欽光(二七一八―一八〇四)の仏教批判の言説に着目し、さらに維新期の仏教界の危機感を動機として釈雲照(一八二七―一九〇九)らによって結成された「諸宗同徳会盟」を取り上げ、仏教(史)学の成立以前における僧侶の「自己批判」という行為の展開が考察される。維新以降、仏教界の危機意識は仏教刷新の機会として捉えられるようになるとされ、第二章では、そうして成立した「言説的装置が、仏教(史)学なる分野が形成されるにつれて、如何なる変遷を遂げた」(二二〇頁)かが考察される。とくに「近世仏教」の評価のあり方に着目し、鎌倉新仏教の「隆盛」という認識の成立と同時に、「近世仏教の衰微」という言

説が定着し、合わせて「鎌倉新仏教中心史観」の原型が現れ(二三〇頁)たことが指摘される。さらに「近世仏教の衰微」論は、辻善之助により近代的な学説としての「墮落論」として提唱されるに至ったという。そして、「墮落論」という言説の歴史的意義とは、「明治初期の廃仏毀釈を経た仏教集団が近代仏教として再出発するために必要な語り方であった」(二三六頁)と結論されるのである。

第三章は、さらに辻の仏教史学に焦点が当てられる。「実証史学」と評価される辻善之助の学風は、決して「実証性」のみで語れない部分があり、仏教に対する彼自身の研究動機が関わっていることが指摘される。すなわち、辻の近世仏教像の背景には、「同時代の僧侶に対する厳しい批判的な立場だけではなく、彼自身の仏教に対する個人的な想いや、社会に弊害を与えない仏教の在り方の構想といった動機があった」(二六三頁)という。「倫理観」と不可分な「想い」や「動機」に基づき、辻が「実証史学」を逸脱し理想的な仏教の構築のために動いたと指摘する著者は、そこに辻の「政治性」を見出すのである。

第四章では、辻以降の近世仏教研究に焦点を当て、辻善之助が提唱した「墮落論」の継承と批判の様相が取り上げられ、「近世仏教の衰微」なる言説が如何に語りの枠組みとして機能したかが考察される。具体的には、辻を引き継ぐ、圭室諦成(一九〇二―一九六六)の「葬式仏教」論。仏教が生きている姿の探查に拘った学術雑誌『近世仏教』の竹田聴洲(一九一六―

一九八〇）や宗教民俗学の宮田登（一九三六―二〇〇〇）は、考察対象の選択で、「墮落論」に束縛されていたこと。「近代性論」としての展開においては、檀家制に目を向けずとして柏原祐泉の視座への「墮落論」の影響が指摘される。また児玉識、奈倉哲三、有元正雄らの「真宗」特殊論も「近世仏教墮落論」の打破を目指すものでありながら、大枠としてはその枠内に留まる立場（引野亨輔）であると、指摘される。さらに大桑斉と高埜利彦の所論が取り上げられ、一九八〇年代以降、「墮落論」の枠組みは「説」と見なされるようになり、「廃棄」の段階に至ったとしている。

第二部「結語」では、以上の第二部の流れの概略と「墮落論」を乗り越えられてこなかった要因として、「史実」を「実態」とする近世宗教研究者の歴史叙述への認識の問題を指摘する（二九八頁）。そして再度、辻の「宗教界」との密接な関係を見落とすべきでないと指摘し、「過去を描く行為に内在する政治性に自覚的であることは極めて重要である。宗教なるものを語る場合はなおさら、とも言えるであろう。」（二九八頁）と締めくくられる。

最終の「結」では、以上全体の考察の概略と、第一部と第二部で描かれた言説の形成過程の関係を、「前者には国家にとつての『ふさわしい』仏教の有り方という問題が存在し、後者には、『仏教の理想』なる観念に伴う現今仏教への不満という要素が働いた。関係しながらも異なる次元において、ネイ

ションに対する信奉と、『正しい』仏教の有り方への欲求は、『鎌倉新仏教中心史観』および『近世仏教墮落論』という、日本仏教史学における二大パラダイムの出現に直接に関わった」（三〇〇頁）と結論している。

四

以下、本書の内容に関して気になる点などを述べたい。

まず第一部第二章の「一八九〇年代中葉まで比較的に自由な言説空間であった『日本仏教』は、村上专精の学術的営為により宗門の独自性を語る場へと変わっていく」（二〇七頁）との理解についてだが、果たして、村上の『日本仏教史』論のみの分析で、その後の『日本仏教』の言説空間の特徴を結論づけられるか疑問の余地がある。「結」で著者が課題として示すように、宗門人かつ官学アカデミズムの言説の受容や変容過程の、さらなる考察が待たれる（三〇一頁）。

第一部・第二部を通して、著者が『日本仏教』論の展開と『鎌倉新仏教中心史観』の成立と定着について、一つの見方を提示している点は、本書の評価されるべき点であろう。ただ、著者も「結」で今後の課題として述べているので指摘するに留めるが、本書の論点として重要な『鎌倉新仏教中心史観』の成立過程については整理の不足を覚えた。また、『墮落論』との関係についても、それぞれが第一部と第二部でその形成過程が別に追跡された分、もう少し論じて欲しいところであった。

また、本書の考察対象として、宗門人かつ官学アカデミズムの頂点の人物にスポットを当てた点は、こうした学説知の展開を見ていく上では、有効な視座の設定であった。真宗がこれほどまでに近代の仏教史研究に影響を有していたことは想定以上であった。登場する仏教（研究）者の多くが、官学アカデミズムの研究者であり真宗関係者であつてみれば、日本仏教史研究は、彼らの特権的な立場から、いわば「宗派意識」（九五頁）を胚胎しながら構築された語りであるとする見方は、説得力を感じるものがある。昨今、いわゆる「旧仏教」を再評価し、鎌倉新仏教史観を相対化しながらする仏教史研究がなされつつあるのも、こうした問題意識が共有されていると思われる。また、「宗派意識」の問題については、これは第二部で指摘される辻の「政治性」（二九八頁）とも関係するが、仏教史研究の世界では、自明で不問のままにあつたと言うべきであろう。この問題は、自戒を込めて言えば、宗門内部の研究者は自覚化すべき重要な課題である。研究者として、宗門の内部に在ることを自覚しながら、同時にいかに外部の視点を持ちうるかが常に問われているのである。それは、例えば、日本思想史研究において、「日本人」でありつつ、「日本」の外部に立つ視点をいかに持ちうるかということと同じかもしれない。

それにしても、こうした真宗関係者が何故、近代の「日本仏教」の学知の生産現場に携わることになったのが、気になるところである。江戸時代からの宗学の伝統と蓄積を有する真宗

東西本願寺教団は、多くの学僧を輩出し、合わせて明治初年から率先して欧米諸国への視察を行い、新時代への対応の準備に積極的であつた。仏教学や歴史学という近代的学知への対応も、こうした真宗教団の動きを鑑みれば、後にアカデミズム界で真宗関係者が何らかの役割を果たすことも、単なる偶然とは考えにくい。本書の考察は、こうした近代真宗思想史においても十分に解明されてこなかった重要な課題が残されていることを照らし出している。

さて、本書の底流には、厳しい官学アカデミズム批判と宗派意識批判という問題意識がある。極論すれば、アカデミズムと宗門という二つの権威によつて構築されたのが「鎌倉新仏教中心史観」であり「日本仏教史」の語りということになる。従来、自明なものとして不問にされていた次元の課題が、厳しく、著者により問い質されているのである。

ただ、第二部第四章での「近世仏教」の学説史を「墮落論」との関係から辿る描写に関して、とくに大桑育の所説の部分などは、著者の考察が表面的である印象を抱いた。取り上げられたのが近世仏教研究の重鎮たちによる格闘の末の研究成果ゆえに、余計にそのように感じられた。

むろん、本書は、こうした日本仏教史の語りを支配してきたパラダイムをいかにして乗り越えることが可能なのか、と問題提起し、またその乗り越えを試みているのである。仏教史研究が、そうした学説レベルでの通説をきちんと総括する前に、

「逃走」(一八四頁)し、研究者の個別の関心に向かつてしまつていたとすれば、それは、著者に言わせれば、無責任な態度であるだろう。その意味では、本書は、かかる課題に真正面から対峙し、論証してみせ、重要な問題提起を行ったと評価するべきであろう。

最後に一点。辻の日本仏教史の物語をめぐってなされる著者の「歴史はエクリチュールであり、物語であるが、その物語を描く動機となるのは「真実」の探求のみならず、その語り手による「善」も重要である。ここで言いたいのは、何を記憶すべきか(そして「歴史」として何を描くべきか)ということとは、語り手の倫理観によって大きく左右される、ということである」(二六四頁)との指摘は、学説の歴史を物語る著者にも、そのまま向けられる言葉であるだろう。それは、同じく辻に対して、「過去を描く行為に内在する政治性に自覚的であることは極めて重要である」(二九八頁)という著者の指摘についても同様である。では果たして、著者が学説史という歴史を語る際の動機をなす「善」「倫理観」「政治性」とは何か。こうした著者自身の立場に関しては、本書からは明確には読み取ることが出来なかつたがゆえに、気になる点である。その他、著者が用いる「言説的装置」(二二〇頁)・「言説空間」(一〇七頁、二九九頁)という方法的概念は、本書の理論構成に関わる重要なキーワードであるがゆえに、読者の理解を促すためにも、注などで説明を補うことあればよかつたかもしれない。

以上、最後に若干の気になる点などを述べたが、本書の論旨の土台が揺らぐことはないだろう。歴史学では今、こうした「史学史」が語られ、パラダイム・シフトの最中にあるようにも思う(成田龍一『近代仏教研究の画期を為す研究』中公新書、二〇一二年)。本書もまた、仏教史学についての「史学史」の試みと言えようが、まさに近代仏教研究の画期を為す研究となる。著者が示した研究成果と問題提起が共有され、近代仏教研究にさらなる新時代が切り開かれ、研究が伸展し、深化することを期待したい。

(大谷大学准教授)